

栃書連会報

身 辺 雑 事

川 俣 古 舟

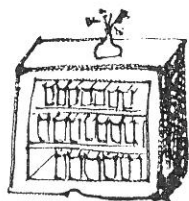
第5号

栃 木 県 書 道 連 盟
振替口座 宇都宮5-15222
会 長 七 海 水 明
〒320
栃木県宇都宮市花房 3-2-25
TEL (0286) 34-0622 局
編 集 事 務
印 刷 ショウワ印刷(株)

家を建て替えた時……随分久しい前のこと……狭いながらも、時にはお客もあろう、子供たちも泊るであろうからと、それぞれの部屋を計画したのだった。ところが常用部屋の狭さとガラクタ物の実状がそれを許さず、お客は書齋で、子供等は窮屈さを忍んでと、計画は画餅に終わった。そして、そこはいつの間にか家具やら書棚、書籍雑誌、反古、作品、その他雑品等の置場を変った。その上捜し物の度にかき廻し散らかし放題で乱雑を極め、お恥しいことだが、足の踏み場もない状態だった。これではと、ここ数年再三に亘りその整理整頓を考え手をつけながら、その都度掛け声だけに終っていた。

思案の末、新しく棚を用意し、この春の学期休みを利用し、孫達の手を借りて、三日がかりで整理をした。まだ未完だがその時のことである。孫が書籍を区分しながら、お祖父さんもどうかしたねといった。同じ本や法帖が幾冊も出て来た。常に「本は一度読んだら再び手にしないつもりで精読しろ」と云ってる癖に、一度読んだのを忘れて又買ったのだらうという訳である。廣言を突かれ一本取られた形で赤面した。それはとひと言云おうとしたが、弁解がましくなるので云わなかった。それでよかった。ダンボール大箱を抜くと、初版の天来の学書筌蹄、木版の墨

場必携、四書五経等が丁寧に仕舞い込まれていた。当今では却々手に入らないもの、筌蹄は当時の薄給でどう都合して購入したのだったか、四書等は山崎匡先生の指導を受けた時のもので感慨新ただった。孫達は木版の書籍を珍しがっていた、時代の経庭を直かに感じさせられた。それに若い頃自分が筆写した経本数種が一緒に入っていた。その根気に微笑を禁じ得なかった。作品集の多いのに驚かされた。大判からA5判までザット百二十冊を超える。往古の先哲から現代作家、同志朋輩、私等のものまで、市販、個人版、記念版、書展集等々、それぞれがエキスで書壇の趨勢も窺え知られる。



親しく原作を拝見したもの、或はせて集帖だけでもと購ったもの、寄贈を受けたもの。それぞれが入手当時感銘を受け裨益するところ大であった。豊臣秀吉手鑑集は素通りしただけ、これからユックリ観賞を繰り返したいと思う。永い書道生活のうちに、作品や書籍、用具類等が蒐集された。それが居場所を狭める困ともなり、観賞も思いに任せない現状で、中には記憶が薄れたり、活用には遠ざかったりのものがある。今度の整理で、こうした機会の肝要さを痛感した。七海先生の、急なことだが、書に關しない随想でも、と御話を受け、何とも御遠慮しようがなく紙面を汚した。御容許を願う。

第二回 栃書連女流作家書展

昭和六十年二月十五日から十七日まで、栃木会館ギヤラリー(上)で開催された。出品者五十一名、会員百名なので、約半数ということ。折角会場を広くつたのに残念であった。

発生川氏 モスクワより還る

会員の発生川天遊さんが、この程三年間のモスクワ日本人学校の任務を見事に果たして元気に帰えられました。おめでとうございます。なれぬ異境での三年間はさぞ多くの辛苦もあったことでしょう。まことにご苦労様でした。これからは得難い貴重な体験を書作の上にも生かされる事でしょう。ご自愛の上、ご活躍を切に祈つてやみません。

(白石)

第38回

栃木県書道連盟会員展

昭和59年6月1日～3日
栃木会館上下ギャラリー

批評 宇留野清華先生

赤沢 竹軒氏 他人のよさを見、ぬすんで帰ることが大切だ。多聞、多見、書の要諦

赤沢 豊氏 淡墨よい。うまい、こなしている。「無」がうるさい。「為」ふところ大きくよい。

新井 幽秋氏 印材、普通のかつらの木、長いこと篆刻をやっている。側刻の方ゆたかさあり、線質ゆたかで面白い。特に「東風」よい。いい作品だ。

新井 幽石氏 達者である。父よりうまい。一寸いそがしい書きぶりだ。もつといい作品が書ける。もつと呼吸をゆるめてゆつくり書くとよい。最初の四字よい。扁と旁をもつと離すとよい。ゆるやかに大きくなる。

石田 鶴邨氏 なかなか線にこくがありいい作品だ。扁と旁がくつき過ぎる。明清調だろうがゆたかさを、ふわつとした形にしたらしい。落款うまい。キヤリア相当ある。半切にこれだけの文字を入れるのは難かしい。

聯落ちなら容易いが、完成するのに苦労があったのでは。

宇留野 天外氏 実に達者であるが溺れている。もつと粗野なところあればよい。中間より後半よい。渴筆よい。線に深さあり、左の余白広すぎ、全体に明るく構成を、「宝」やりすぎ、腕はある。奇抜な漢字を用いないこと。印よし。

臼井 仙道氏 面白い。四海を中心に、右と左にわかれていいる横物難かしい。一つの流れがほしい。線が切れていてよい。最初よい。終りの部、調子が違う。変ってしまった。前半、線が深い。なぜ空間をのこしたのか私にはわからない。

生沼 冬情氏 文章とらえ、面白いが、筆が側筆になり過ぎていいる。もつと直筆で書くことよい。後半は直筆でよい。筆の腹を使い過ぎ。

大浦 舟人氏 なかなか線の切れ味よし。小さい印の方がよい。

刀はよく切れている。線がきびしい。いい作品だ。

大谷津 紫水氏 近代詩文をこだけ書きこなし、いい作品だ。明るい感じ。濃墨でよくまとめている。前半うるさい。空間を生かすとよい。後半よい、ゆつたりしている、線質よい。落款おさめ方よい。大変いいものを拝見させてもらった。

小笠原 隆忍氏 楷書は嫌がつて書かないものだが、しつかりとした線質でよくおさめている。

「霊」もつと背を高く。同じ大きさにまとめようとしたところに一寸苦しさあり、揃ってしまった。しかし面白い。ねらいは下は顔真卿、上は鄭道昭の調子、全体を統一した方がよかった。

小倉 深峰氏 実に達者、これだけ書くのは大変だ。練れた線、難かしい作品だ。三行にしてやればもつと表現が楽であった。もつと楽におさめるように。落款うまい、よし。

佐藤 堪氏 大きく構え、表現力豊かである。「聲」という字は本人も満足していると思う。上の三字に対して最後の字、違っている。豊潤ないい作品だ。

篠崎 守石氏 一寸早く書き過ぎる。運筆の速度、もつと筆を大切に運ぶように。扁と旁を開けてほしい。非常によい。

篠原 珠篁氏 実に達者、何のやどりもなく、ずーっと一気呵成に流れている。一行の上の部、なぜ余白を残したのか、一行の下、三字、窮屈、字間をあけてもつと明るく。腕、線質、いい。

篠原 松情氏 創玄風の近代詩文書である。非常にとつとつとしているが面白い。もう一寸間をあかして明るく。「鳴」の口、鳥、もとになるのは漢字、かな古典だ。扁と旁はもつと広げている。筆の使い方よい。「女」特にいい。

臼井 薫苑氏 字数は多いが三行にまとめている。達者、筆が一寸ねている。もつと直筆で懸腕直筆で書くことよい。若いのにうまい。





高梨 峰鶴氏 ガラスに入れた
らしいか悪いか、うるさい。ラ
イトの光りが映ってしまう。ガ
ラス入れない方がいい。最近の
傾向としてはやっているが、見
にくい。いい作品、練達の作。
字間をあげるともっとよかった、

明るくなる。落款よい。
高橋 竹瑞氏 面白い筆を使っ
ているようだ？（普通の筆）
世の中の欲を離れた淡々とした
味あり、面白い。最後の渴筆よ
い。印は朱文より白文の方がよ
い。楽に見られてたのしい。

豊田 静迪氏 非常にやわらか
い、味わいあり。若い美しい女
性のような感じ。若々しく、線
につやあり、つやは大切。なご
やかさあり。

西尾 青鳳氏 終戦後はやった、
作品書いてから紙を切る、面白
い。上部切れている。四、五年
間はやったが、今はやらない。
一時珍らしくおこなわれた。奨
励しない。

平山 尚香氏 素直な作品。表
装、見えがしない。自分で考
えてやること。くせがなくいい。

西脇 紫竹氏 線がねばっている。
濃墨は大変だ。ゆっくりと
一筆一筆を大事にして書いてい
る。落ち着いた線の深さあり、
感心した。

七海 水明氏 青墨の色、いい。
「貧」構え大きくよろしい。う
まい。

本多 雨情氏 前半と後半が切
れている。それぞれ一つの作品
になってしまった。左の方がよ
い。右側、デフォルメ、考えす
ぎ、自然さがない。少しも面白
くない。字を作り過ぎている。
後半の方がよい。

平石 博典氏 うまい、線質い
い。長峰羊毛で書いている。ふ
ところ広く、流れ、脈絡一貫し
ていて、よいかな作品だ。

松本 智華氏 品のいいかなだ。

真面目で、散らし方もよい。明
るくまとめている。表装はあわ
ない。一色のものにするとか、
作品を生かす工夫を。

増渕 硯水氏 大したものだ。

よく筆が動いている。落款まで
気脈貫通している。「花」の形、
あやしげ、筆が一寸走りすぎ、
潤渾よい。

溝口 柳鶴氏 翠軒調の作品だ。
紙、失敗、にじみでていない。
線の深さが乏しい。「風」嫌だ。
紙よくない。

村田 幽香氏 淡墨だが、墨の
質、一寸安い。墨を含ませてか
ら一寸ぬぐって書くといよい。明
るい色がでる。しかし、豪快、
堂々としている。「華」よし、
思い切っている。気力充実して
いる。

谷古宇 栖洞氏 面白い。六朝
楷書の味がでている。扁、旁よ
くあいていてよろしい。文字を
明るくする、思い切つてあけて
全体明るい。成功している。紙
は日本製、模様、面白い。

矢内 硯風氏 よくまとまっ
ている。すぎがない。欲を言えば
渴筆なし、もっと潤渾の変化を。
全体的に重い。

矢内 竹華氏 扁と旁がくつつ
き過ぎた。達者だが作品として
の流れがない。別々のものとな
っている。狭くうるさい。

山中 香葉氏 空間を思い切っ
て生かしている。字間の空間の
追究をしている。細い線でも筆
が立っている。細い線でも筆が
浮いている。筆が浮いている。
「風」の構えよくない。細くともつつこん
だ線ならよい。構成は成功して
いる。

吉田 景堂氏 一字目「暮」よ
むに大変、よめない。やりす
ぎ、若いだからやりすぎはや
らない方がいい。強い線質、い
い。形を作り過ぎている。

吉田 竹溪氏 面白い。含墨後、
一寸墨をふきとってから。「行」
の字、やりすぎ、もっと素直に。
筆力あり。

渡辺 華陽氏 淡墨うまく使い、
ふくよかな作品。ただし、半分
から上の部、線もきいている。

「舞」「柳」、ゆたか、下部、
味わいなし。十四文字程度で流
したらよかった。下部つめてき
つい。

渡辺 竹芳氏 七枚程度、書い
たようだ。線は若い、味がある。
渡辺 登水氏 まともな勉強し
ている。嫌味なし、一生懸命書
いている。一行目字間あいてい
る。二行目ややきつい。落款は
左側に入ればよい。

中津原 軒陽氏 面白い。落款
うまい。扁と旁があいているか
ら大らかで明るい。「語」の文

字が上三字にあわない。上三字、なごやか、ふくよか、ゆたかな精神状態、線よろしい。

松本 宜響氏 篆書よし。タッチ鋭い。思い切って線を作っている。線のひびきあり、落款、やり過ぎたところあり。運筆早く、崩れていない。

斎藤 笙風氏 呼吸の乱れなし。渴筆の使い方がよい。全体よく流れている、形も乱れていない。多字数難かしいがよくまとめている。

沢田 寛氏 濃墨、長峰、楽しく書いている。「行」の扁と旁の空間を広く、線質はよい。のびていて、ねばって明るい。

小林 翠香氏 料紙よい。素直な明るい線質、後半よい。

「秋の」、少し大きく表現した方がよかった。品のいい線質だ。

田村 雅春氏 文字が大きすぎ、字間をあけて、作品の明るさを追究した方がよい。文字を小さく、構成を明るく。ふところの大ききあり。「龍」、大きい。

動あり、堂々としている。

よい。昔の名刀のようだ。面白い作、元氣一杯。

羽鳥 龍峰氏 よくまとまっている。一寸旁が下っている。形を工夫するとうい。練達の筆だ、いい線質だ。

沢田 幽石氏 完成度高い、よくまとまっている。流れあり、筆もよく動いている。形、少し長くした方がよい。用筆法、まとまっている。

乙川 玄洞氏 真すぐに見えるかな? 線質は強いが、「四」だけなぜ行書にしたのか、あわない。「春水」の部、大胆。

川上 尚雲氏 のびやかに楽に書いている。見ていてたのしい。明るい線質、若い、つやあり、面白い、いい作品。

粕谷 東峰氏 思い切って書いている、気力充実している。面白い。墨がおちていて効果的、「一」の右に寄せた位置、生きている。淡墨の研究をしている。

加藤 曉空氏 ふさわしく味わいあり。特に「寂」いい。線質、さびた枯淡味あり、作品明るい。表装よくあっている。紙も落着いていて、成功。

川上 大岳氏 線質強い。ふみはずさないよう注意しながら書いている。字の扁、旁をあげたらもっとよくなった。要点をびしっとしめて完成度高い。

川上 汀蒲氏 あやしげな隷あり面白い。一字一字含墨して書いている。渴筆の味があると遠近感がでてくる。真面目、落款いい。大胆。

菊池 茅屋氏 全体的に線質強くない。てらいがなく、自分自身、全力投球、真面目に書いている。扁と旁をあげて明るくしてほしい。

岸 豊水氏 達者だ、実にいい、流れあり、よどみなし、潤渴の使い方がよい。ところどころ文字の大小の変化あり、いい作品だ。一寸くつき過ぎた部あり。

小滝 きみ氏 青木香流調か。(小林翠寛調) 濃墨ゆつたりと明るく表現している。いい作品だ。羊毛濃墨でよい。表装いい。真白の枠張りよい。光彩あり。

増田 松香氏 ねばりある線質いい。「禪」の旁、いい。筆力充実している。「心」、冴えた筆力、切れ味よい。

小森 梅寿氏 線の味はいい。のびやかさあり。欲を言えば、紙面に対して文字が多く大きすぎる。空間が多いほど作品は明るくなる。一寸大きい。落款の「寿」、研究してほしい。

益子 翠茗氏 印もいいが、側款もいい、面白い、結構。若いようだが作品はしっかりしている。

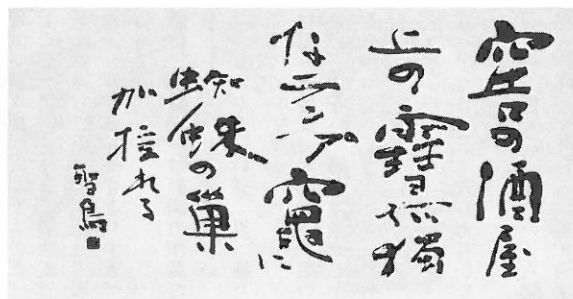
文責・大谷津 昭男

受賞者

連盟賞を受賞して

重原 聖馬

この度、はからずも連盟賞をいただき感激の極みでございます。これも日頃厳しくご指導下さいます恩師をはじめ、県書道連盟幹事諸兄の温かい励ましの賜と只々深謝しております。



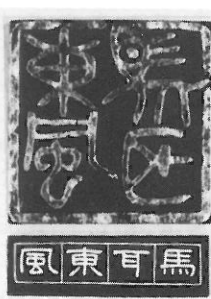
受賞作は、あたためていた草稿の中から選んで、羊毛で「詩情豊かな書」をねらって書きました。

この受賞を機に一層研鑽を重ねたく存じますので、ご指導の程よろしくお願いいたします。

連盟賞を戴いて

新井 幽秋

受賞の作品は、新しい試みの作で、篆刻は印影を観賞するもので、これを刻字風にして篆刻を直接観賞する様に、桂の板に刻し金箔を張りました。



近代詩文書にとりつかれて十数年になります。勉強不足でいつも不本意ながらの出品となります。

還濟河漸 来塵玉食
藏名隱仙丘希言

実技講習会に参加して

宇都宮市 館沼 天游

六十年に入り書道連盟最初の企画の一つ、実技講習会が二月十七日午前十時から宇都宮市の丸治ホテルで催された。講師は貞香会の中浜碩堂先生、内容は「鄭道昭の書」であった。昨年に続いて同じ鄭道昭をとりあげた為か参加者は「イマイチ」であったが、講習内容は豊富で面白く、講師の若く、熱っぽい調子にまきこまれて真剣にかつ有意義な数時間を過ごした。その中から私の心に残った言葉のいくつかと感想を織り交ぜて紹介してみたいと思う。

一、何を習うか、なぜ習うか。講師の師匠「中村素堂」の言葉を引用して、「私の原点（根幹）は鄭道昭である。種々の書蹟を学んで帰したもののが鄭道昭であった」と。つまり臨書は創作につなげる為、そして創作（自分）をどうゆう形で作りあげるかということになる。続いて講師は言う、「四十才までには自分の書風を決めたい（もちた

い）、その為に三十代に浅く、広く、かな迄含めて臨書した」と。何事でも同じだが目標をもつて事に当ることの大切さと、鄭道昭の書が技術面でも鑑賞面でもいかに価値の高いものであるかを改めて認識した。

二、鄭道昭の書

推理を交えた講師の話は特に興味をそそった。まず二、三年の間に各山（雲峰山、天柱山、太基山）にあれだけの数（三十種）と規模の作品を残した。本当に本人の作なのであるうか。非常に疑がいたくなるし詮索もしたくなる。講師の友人が「鄭道昭の作でない」という仮説を立て、資料を集め、比較分析して研究したが結局本人のものであるという事に帰したという。その研究成果が出版されたとか。鄭道昭の作が署名入りで、しかも紙に残っていたらまた面白い比較が出来ただろうに、と私は

思った。また反面摩崖刻しか残っていないから、そして面白いから鄭道昭なる人物がクローズアップされてくるのだとも思った。鄭道昭の作品が面白いのは摩崖刻であり、不鮮明であって曖昧模糊としていて、いくら研究しても尽きない泉の様である。これが妙味であり、魅力的でもある原理で、何回でも行つて見たくなる理由だと講師は言った。鄭道昭はなぜ三つの山に自分の書を残そうとしたのか、この地を終焉の地と決めていたのではなからうか（注、鄭義下碑が五一年で、五一六年に亡くなっている）いろいろの推理を入れて講師は話されたが、紙面の都合で紹介出来ないのが残念です。

三、ズームイン鄭義下碑

実物を写真にとり、それを部分拡大したものを数多く見せて戴いた。ヤゲン彫りの跡がはっきりとしており、V字形溝の一方に光が当り他方が影となつてかなり細くスマートに見えた、丁度半欠の月を見るようであった。逆さにすると他方が見えたと誰かが教えてくれた、かつて多胡碑や那須国造碑にさわった時と同じ感激が私の脳裏に甦った。実技指導は講師が日常比較研究した資料を披露しながら、筆勢リズム、結体と細部の点画に至るまで親切に指導された、私も真剣に取組んだ、そして三回も指導を受けた、しかし一回も赤丸は戴けなかった。

四、フィナーレ

（六〇年四月記）



第 十 二 回 県 書 道 展 覧 会

書 道

小 暮 青 風

本年応募の総数は二四一点で、その中で漢字作品が一六〇点を占めている。次いで二三点のかな作品であるが、これは漢字に比較していささか少ないと思う。指導的立場の作家が少ないのである。近代詩文書、篆刻其の他を加えてもその数併せて八一点という状況であった。

鑑審査は、小暮青風、中井史朗、津久井汀舟、重原聖鳥、桜井敬翔の五氏によって行われた。挙手により、A・B・C・Dのランクに選別して鑑査を進めた。ジャンル別の優劣の差も考慮に入れて、公平を旨として真剣かつ和やかに終始したのである。従って篆刻の如く全般レベルの高いところは、入選率がよい結果となった。

入選一三七点を決定したが、これは総数の五割強にあたるので、この種公募展としては好ましい結果となったと思う。理想を言えばもっと厳選して作品鑑

賞に豊かなスペースが欲しいことになるが、県展は県民を底辺とする地域文化の向上発展を期するところをモットーとすべきであるから、緩い競争率でもっと多くの人達が参加出来ることが大切であるかも知れない。但し作品の大きさの制限が中央展並みなので、入選作はなかなか見込めがある。どの作もそれぞれの風格を備えていて観る人の興感を誘うことを信じて疑わない。選外作の中にも心に残る佳作があったから、捲土重来前進されます様に祈ってやまない。

さて、入賞作八点については、審査員一同意をつくして会議の上の結果である。以下それらの作品について私の雑感を述べることにする。

芸術祭賞 「今様鳥啼歌」

谷島 郁

いろは歌別体の今様であるが、横額に極めて自然な筆運びである。然しこの作は一見無雑作に

書き進めているようであるが、技術的にも心境的にもレベルの高い作である。淡々と筆を進めて、中頃茂密な盛り上りをつくり、後半暢達した筆致でシャープな線を切り渴筆の美しさを出している。最後の一句を自在な重厚さでおさめている。序破急を心得て、変化と統一に満ちた厚みのある力作である。

準芸術祭賞 「高青邱詩」

斎藤 笙風

たて八行に細字で纏めている。気取らない静かなタッチがいい。平常心で、墨を筆にふくませては書き続けて行く。品格の高い作となったが、子細に見ると線の透徹さが今一息というところ、これを徹すればより高い香気を放つであろう。

準芸術祭賞 「江流霧中」

兼目 久

大字四字を草体に巧みにやつた。たての四字物は意外とむつかしいものであるが、この作は「流」と「霧」の中の二字の活躍に焦点を合せてダイナミックな盛り上りを出していて快い。大小の配慮が自然である。最後の「中」のたて画がもつと動けば、余情がもつと胸を打つてあろう。

芸術祭奨励賞 「高青邱詩」

沢田 幽石

前記斎藤氏と同じく、明代の詩八高啓の望郷の懷を述べた七言絶句に取材している。二首を三行に連綿体で表現した。文字の疎密大小、墨色潤渴の変化の妙を得て美しい。練達の作である。

芸術祭奨励賞 「秋の夜」

関口 観山

佐藤春夫の詩を五行に散らし書きしている。行間をゆつくりあけて、心のゆとりを見せてくれる。線がよくはたらいいて、なつかしさのあふれた作である。落款も見事。

芸術祭奨励賞 「希求」

長嶋 壮典

大字である。濃墨である。氣魄の凜とした作である。墨継ぎを二筆にしてもよかったと思う。二にして一、一にして二となる境涯がこの作のねらい所であろう。但し一筆でやろうという意図に捉られ過ぎて、モチーフの凝結する力を分散してしまつた感がある。「求」字の終筆に空悔を想起させるものがある。印象に強い作である。

芸術祭奨励賞 「秋寒細雨」

人見 翠苑

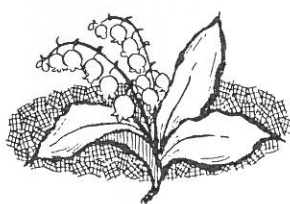
草体二行十二字、おおらかに筆がはたらいいて流動の美しさが見事である。いささか淡墨に過ぎたと思われる。淡墨の抒情美

もさることながら、日を経て画仙紙の白が褐色する時を思うと、薄きに失するのは心すべきである。

芸術祭奨励賞 「亢龍有悔」

吉田 芝更

白文朱文の二顆作である。方形と円形とであるがいずれも線情があたたく豊かである。出品作の中に、意匠をこらして味のある作も眼についたが、真正面から立向っているこの作が審査員一同の推すところとなった。落款が淡墨で大きく書いてあったが、濃墨で文字を小さく目にしてピリリとやりたいところである。



福島県展を見て

赤 澤 豊

昭和五十九年六月十七日、七海水明会長を筆頭に真新しい新幹線に乗り、約一時間で福島駅に着き、駅からタクシーで約十分、福島県展会場である福島県文化センターに到着、車で来た方々と合わせて参加者十八名でした。会場では、日本画・洋画・彫塑・工芸美術・書とまさに県をあげての一年間の文化の祭展であるかのように、ところ狭しと展示されており、第三十八回を迎えた歴史の成果を物語っているようでした。書の部の出品者は高校、大学、各地のグループ、主婦の進出等で、実に幅広い層に恵まれているようでした。出品点数は何と一般公募で三六六点と多いため、会場の関係でスペースが限定され、入選率が他の部に比し最も厳しく、五十%の入選率で、入選一八三点、そして招待、依頼が四十四点でした。賞の内訳は、依頼の部特別賞一点、公募の部、福島県美術賞二点、奨励賞五点、佳作十二点でした。

さて、私達は順路にそって一点一点感じたことや、疑問を話し合いながらみてまわりました。楷・行・草・篆・隸の漢字、かな、少字数、調和体、篆刻、刻字と作品の幅が広く、基本をしっかりとし身につけ峻勁醇平な線をしているもの、稚拙美をみせ



たり、素朴な味わいをみせているもの、心のままに悠揚とした、或いは闊達な動きをみせているもの等線に冴えある作品が多く目につきました。こうした書展を見学することによって大いに目が養われ鼓舞されたので、次回もこのような計画を取り入れることは大変よいことに思います。

第38回 福島県総合美術展覧会出品数一覧表

区分 部門	招 待			公 募				合 計	前年度 出品数	増減	本年度公募陳列数				本年度 総陳列 数	前年度 総陳列 数
	招待	依頼	計	無鑑査	一般	青少年	計				無鑑査	一般	青少年	計		
日 本 画	16	6	22	1	49	1	51	73	88	△15	1	40	0	41	63	68
洋 画	58	14	72	1	227	92	320	392	449	△57	1	114	29	144	216	224
彫 塑	19	6	25	1	41	9	51	76	73	3	1	34	7	42	67	66
工 芸 美 術	18	3	21	0	96	11	107	128	117	11	0	52	11	63	84	87
書	22	22	44	2	366	3	371	415	392	23	2	183	2	187	231	232
計	133	51	184	5	779	116	900	1,084	1,119	△35	5	423	49	477	661	677
前年度出品数	135	51	186	4	775	154	933	1,119								
増 減	△ 2	0	△ 2	1	4	△38	△33	△ 35								

社中だより

はなぶさ会

主宰 七海 水明

来る六月十三日から十六日まで栃木会館ギャラリーで第十五回展を開催する予定。昭和四十五年発足。現在の構成メンバーは女性八〇パーセント、男性が二〇パーセント。そのうち古典かなを習っている女性八名、木簡が好きでやっている女性一人、他は臥龍誌によって楷、行、草、

かなの四枚毎月競書として出している。女性の大方は主婦であるがあまり休まずにやっている。家事の暇をみてのことなので中々思うようにはいかないようである。でも条幅部への出品などもかなりやっているのには感心させられる。男性数名は積極的に研究を進めていることは嬉しい。主宰としてはあくまでも個性を尊重し、習う側は書くことによって自分の美しい心を見出してほしいものだと考えている。それにしても、表現の技術を身につけなければならぬわけである。書風としては、温健整正

であり、その芯は骨のつよさであると思っている。

悩みとすることは、創作力をつけるためには、如何にして時間をうみ出すかということである。創作ということを変えずに、新しいものだと考えすぎているようだが、やってみると面白いといっている。特別に練成会とかいうことはしたことがない。年一回の展覧会作品に頭をいためているようなわけである。

抱玄社

幹事 増淵 春雪

抱玄社は、墨池會の内の研究グループである。発足以来二十余年、メンバーは相変らずの十六名である。川俣古舟、三千木両先生を顧問とし、輪番年幹事によって運営している。目的は随時の研究会と年一回の書展開催である。研究課題については特に講師を招き、書展作品は臨書・創作に拘らず、大作に挑み続けている。又親睦旅行もかかせない行事の一つとなっている。同じく墨池のグループに、年代を異にする莖玄(女性)と理玄の二社がある。この三社が、昨年に引き続き今年も合同書展を、七月三十日から六日間開く

ことになり、目下それぞれ制作に励んでいるところである。抱玄は兄貴扱いを受けている。その気分を作品の上に表すのは容易でない。常に緊縛一番これに努めている。

安佐地区書の動向

川合 峨山

盆栽のボケの花が原稿を書く指を染めて馥郁と咲いている。夜外の雨に耳を貸し乍ら、今年の出陳作を観る楽しみを想像しつつ当地区の動向を考える。

安佐地区にもそれぞれ流れは有るが、派は違っても私を囲む人達で月二回萬生會館での古典研究会も軌道に乗り、各自好みの臨書を懸命に追っている。四月に入ってから古典研究会が、毎日書道展出陳作の研究に変わって、現代書としての近代詩文書に挑戦し会員一同額に汗して練度を高めている。これも近日に迫った社団法人書燈社の総合練成会に参加する為の準備でもあるが、各人の自覚に依存する處が多く嬉しい想いである。

一方佐野地区同好者は毎日展での漢字部門への出陳を目指して、市内東山温泉旅館での一泊二日の練成会を開き、毎日新聞社からの取材も有って意気盛な

ものを感じる。

いづれにせよ書道の隆盛は文化の中心となり各地区をうるおして人心の安定に役立って今後が楽しみである。

今春の変体的天候により桜の花も満足に観せずに散らして行つたが、連盟展の見事に花の開くの期待して、この一文を寄

せるものである。



'85栃木県書道連盟訪中団日程

ご日程表

日時	月日(曜)	地	名	予 定 食 事	日次	月日(曜)	地	名	予 定 食 事
1	7月27日 (土)	東京(成田)空港 北 京 空 港		到着後北京市内観光 (故宮、天安門、天壇公園) (北京泊)	6	8月1日 (木)	秦中月 天観ヶ天々 中秦曲曲	安門峰 門安 卓	中国五岳の雄 泰山 登山 孔府に宿泊 (曲阜泊)
2	7月28日 (日)	北 京 駅		(車中泊)	7	8月2日 (金)	曲 阜 (孔府)	孔 府	孔林 (孔子の墓) (孔子廟、顔子廟、周公廟) 孔廟参観 (樓星門、漢石人亭、同文門、奎文閣、その他) (曲阜泊)
3	7月29日 (月)	濰 坊 駅 平度県・青 州 天 濰	揚 山 坊	昼食後天柱山観光 (濰坊泊)	8	8月3日 (土)	曲 宛	阜 洲	午前中自由行動 午後書会 (予定) (車中泊)
4	7月30日 (火)	濰 雲 太 基 山・潤 雲 太 基 山・潤	坊 山 坊 南	雲峰山、太基山観光 (濟南泊)	9	8月4日 (日)	上 海		魯迅記念館、魯迅旧居、少年宮、上海工業展覽館、黃浦公園、友誼商店など (上海泊)
5	7月31日 (水)	濟 南 南 安		市内観光(趵突泉、黑虎泉、大明湖等) 四明塔經由 岱廟観光 (泰安泊)	10	8月5日 (月)	上 海 空 港 宇 都 宮		週日によって時刻が変更になります。